

---

# 契約の騎士

夜刀神 刀夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

契約の騎士

### 【Nコード】

N3319BA

### 【作者名】

夜刀神 刀夜

### 【あらすじ】

えーと、ごく普通な？高校生がある日少女に出会って、契約して戦って、少し？変な学校で高校生活を送りながら少女を守る為に戦う。

…そんな話にしたいな…

## プロローグ（前書き）

処女作です。よろしくお願ひします。

誤字・脱字がありましたら即刻修正します。

## プロローグ

「????? side」

目の前に少女が居る。

私は主の命令で少女を殺さなければならない。

嫌だ。もう殺したく無い。だが、私の身体は私の意思に反して少女を殺そうとする。

私の手刀が少女に当たる。魔術によって、強化された手刀は少女の魔法を阻害する。

誰か…誰か私を殺してくれ…

私はそう強く願う

そう思いながらも私は魔法を使う…

「《火球（ファイアボール）》」

その一言で少女に向かって火の球が飛んで行く。

いつもと同じ日々がただ過ぎて行く　俺、音無桐人（おとなしきりと）　はそう思っていた、たった一人の少女に出会うまでは、

（…どうしようか）

俺は焦っていた。

遡る事30分前

冬の暖かい日に友達と夜遅くまで遊んでいた俺は家に帰る途中「  
近道するか」と近くの神社の林を通っていると

ドオーーン

「っ…爆発!？」

俺はその時爆発?で辺りが一瞬明るくなった時その爆発が起こった  
場所に14か15歳ぐらいの女の子が見えた。

「女の子?駄目だあつちは爆発が起きた場所なのに!」

俺はその女の子を追いかける事にした。

少女を追いかけた先に見たのは先程見た少女と帽子を被った黒い服  
の人間?が戦っていた。

いや戦うと言うにはあまりにも一方的過ぎた。

黒服は見た目は人のカタチをしているが、身体能力は確実に人間のそれを凌駕している。

そんなのが林を縦横無尽に駆け回って少女を追い詰めている。

少女は怪我をしているようで左腕が血に染まっていた。  
そして今に至る。

(…どうしようか)  
俺が悩んでる内に黒服の男が少女に向けて拳を放ったその拳は確実に少女の頭を狙った物だった

(危ない！)  
俺は危うく声を出す所だった。

少女は紙一重でそれを避けたが、少女の後ろにあった木に当たり、木が粉々に砕け散った。

(警察か？でもあいつ人間かどうか…)

その時黒服が少女に向かってもう一度拳を振るった

(考えてる暇は無い！)

俺は、そこら辺に落ちていた木の棒に『気』を込めて黒服に投げつける。

黒服が棒に気を取られている間に驚いている少女の手を取りその場所から避難した。

この神社は、小さい頃からよく遊んでいたから良く知っている。

細い獣道をジグザグに進んで裏道に抜け、とりあえず大きめの木の後ろに身を隠した

(とりあえず撒けたか?)

俺が息を整えていると

「どうして手を出したの？あなたには何も出来ないのに!？」

と、今まで一緒に走って来たのに息ひとつ乱さない少女に怒られた。

改めて見ると、少女はとても綺麗だった。

透き通るような銀髪で蒼い瞳をしていて、

厚めの生地のシャツにショートパンツとニーソックスそして底の厚いブーツを履いていた。

肌は驚くほど白いのに、不思議と不健康…と言うイメージは出て来ない。

俺は思わず少女に見とれていた。

## ブローグ（後書き）

ブローグってどこまでなんだろう？…？orz

感想を頂けると、励みになります。



## 出会い（前書き）

二話目です。

駄文ですが……どうぞ

## 出会い

桐人 side

「ねえ、聞いてるの？」

「えっ、あっ、うん」

ものすごく焦ってそんな返事しか出来なかった  
くそっ絶対今顔赤い…

「ならどうして？」

「どうしてって君が危ないと思って…」

「何も出来ないのに？」

うっ…それを言われると

「はあ…あなた名前は？」

「え？あっ、桐人、音無桐人」

いきなり名前を聞かれるとは思わなくて反応が一瞬遅れてしまった。

「そう、じゃあキリト早くここから逃げて」

「え？」

何言ってるんだ？せっかく助けたのに

「さっきのであなたも危なくなつた私が引き付けるからあなたは逃げて」

「それは無理だ」

俺は即答した。

「女の子を一人にして逃げるなんて俺は御免だ」

「でもっ！」「それに！」「」

「君、怪我してるでしょ？」

彼女は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「だから俺は逃げない」

「何も出来ないのに？」

「それでもだ」

彼女は納得したのか諦めたのか小さくため息をついて頷いた。

「じゃあどうするの？」

「なあ、あいつは何者なんだ？人間とは思えないんだが」

まずは情報が欲しい。  
そう思つて俺は彼女に聞いた。

「……あいつはアンデット、敵の使い魔よ、術者は隠れていて分からないけど、ただの人間では絶対に勝てないわ」

アンデット？ 使い魔？ 術者？ まるで魔法使いが実在するみたいなの…

「ただのつて事は君は違うみたいだな 一体何者なんだ？」

「っ！…それは今関係無い」  
と、少し声を荒げながら言った。

まあ、他人には知られたく無い事もあるだろ…

「まあ、深くは聞かないけど」

「何でアイツに狙われてるんだ？」

「それは…まず私には魔法が使えるの。」

マジで魔法使いかよ…！

俺は驚きを隠せなかった。だって本物の魔法使いだぜ？

それを見た彼女は苦笑して、

「そして魔法にはそれぞれの属性があるのそれは《火》《水》《風》  
《土》《雷》そして《光》《闇》魔法師個人個人が生まれながら

に一つだけ持っている…！右手血が出てる」

見てみると、確かに右手の甲が少し切れて血が出ていた。

「貸して、《治癒（ヒール）》」

彼女は俺の右手に手を添えた。

すると俺の右手が淡い緑色に光った。

彼女が手を除けると、傷はもう無かった。

「あ、ありがとう」

スゲー魔法って便利だなー

「自分のケガも治せないの？」

俺が言うと彼女は首を振った。

「この傷には魔法が掛かっていて私の《治癒》が効かないの…」

「そうか」

便利だと思っただけどそこまでだな…

「今のが私の《固有魔法》固有魔法は人によって色々な種類があるの。」

そして私の固有魔法《治癒》は使える人がほとんど居ないわ。」

「なるほど…大体分かった。」

(さて、どうするか…何か武器が有ればなあ)

「魔法つて俺には無理？」

「魔法？」

魔法を武器に出来ないか…と、思って俺はアリサに聞いた。

例えば雷の剣!…とか。

「うん、魔法を武器に出来ればこの状況を変えられるのになって、  
思っでさ、でもそんな都合が良い話無いな」

すると彼女はとても悲しそうな表情(かお)をした。まるで何か知  
っているけど言にくいみたいなの

「……………出来るよ、欲しい?魔法、でもその為には私と契約し  
ないといけない」

あ、あるのか…何ていうご都合主義…!まあ、あるならこれに乗ら  
ない手は無い。

「契約？」

「そう契約、あなたはあなたの命が尽きるまで私を守る…いいえ、  
私の奴隷、それでもあなたは、キリトは自分を守る力が欲しい？」

俺はの答えは決まっていた

「……………ああ、欲しい」

「そう……」

「君を守る力が欲しい」

「え？」

「だってそれは君が君を守ってくれる人に渡す力なんだろう？」

彼女は目を見開いてとても驚いていた。

「????? side」

私は左腕を庇いながらアンデットと戦っていた

左腕の傷はそんなに酷くは無いけれど、何かの魔法か術が掛かった攻撃だったのか、傷口から魔力が流れていて思うように力が出せなかった。

私の《治癒》の力も効かない。

（このままじゃジリ貧だ）

私がそう思っていたときにアンデットに棒が当たって一瞬動きが止まった。

アンデットは棒が飛んで来た方を向いた。

「あれは…魔力？」

アンデットに当たった棒は魔力の様な何かで強化されている様に見える。

そうしたらいきなり右手を掴まれて走り出した。

それは少し目付きが悪くて軽くウェーブの掛かった黒髪の男だった。見た目は私と同じ17才位だった。

細い獣道を進んで大きな木の後ろに身を隠した時に私は彼に聞いた

「どうして手を出したの？あなたには何も出来ないのに！？」

私は一般人を巻き込んでしまった事で彼に少し八つ当たりしてしまっただ。

そんな自分が嫌になった。

しばらくしても返事が無かったのでもう一度声を掛けた。

彼は何の力もないのに私を助けたようだった。

私は諦めて彼の情報を教えて貰い今の情報を話した。

彼：キリトは私の言葉から私がただの人ではないという事まで突き止めたようだった。意外と鋭い。



キリトが深くは聞かないと言ってくれた時には正直助かった。

そして彼は考えたあと魔法が欲しいと言った。

私は彼に魔法をあげる契約…『騎士契約』を知っていた、だけどそれは彼を縛る事になる。

その契約の内容は契約主が力一（魔法）を与える代わりに契約者が死ぬまで契約主を守るということだった。

そして、契約主には絶対服従する。

私はそれは出来れば避けたかった。

私一人の為に人一人の人生を無駄にしたく無かった。でも私は最後は彼に決めて貰おうと思った。

私は自分が汚いと思った。

私は彼に自分が何者なのかさえ言っていない。

私は卑怯だ、一般人を、彼を巻き込んでさらにこんな契約させようとしている。

私は自分が本当に汚いと思った。

そして彼が欲しいと言った時はとても後悔した。

彼は私のような『罪人』に契約したのだから…

その時キリトが

「君を守る力が欲しい」  
と言ってきた時はとても驚いた。

自分が危ないのに私を守ると言ってくれた事が嬉しくて申し訳なく  
て、良く分からなくて、気が付いたら私は涙を流していた。

## 出会い（後書き）

更新は不定期です。

ストック切れそうので怖い

## 契約（前書き）

わぁ、今日から学校だぁ！……orz

いつもながら短いです。すみません。

だがしかし、次は長く……したいな（涙）

## 契約

桐人 side

「えっ、ちょ、どうしたの!？」

俺が契約内容の予想を言ったあと何故か急に彼女は涙を流していた。

ヤバい…俺何かへんな事言ったか!?

ど、どうする…ここは何か一発芸を…何もねえー

彼女は自分が泣いている事に驚いていた。

「大丈夫、何でもないわ」

そう言っていたので、それ以上その事には突っ込まなかった。

「本当に良いの？」  
と彼女が言ってきた。

「もちろん」

答えは決まっている。

と、そこである疑問が浮かんだ。

(この子名前は何て言うんだろう?)

そう、俺は彼女の名前を聞いていなかった。

「なあ」

「何？」

俺が呼ぶと彼女は服の袖で涙を拭きながら返事をした。

「ねえ君の名前は何て言うの？」

そう聞くと彼女は俯き、少し間を空けてから言った。

「……無い」

「え？」

「私に名前は無いわ」

「そっか」

俺は一瞬考えてから

「なら俺が名前をつけてあげるよ」  
「え？」

また彼女は驚いた顔をしている。

(さっきまで泣いてたのに表情がコロコロ変わって可愛いな)

「だって名前が無いと色々不便だろ？」  
俺は笑いかけながら、  
自然と出てきた名前を口にした。

「だから君の名前は今からアリサだ！」

「あ…アリサ？」

「そう、アリサ、君にぴったりだと思ったんだ」  
「どうかな？」

彼女に聞くと

「やだ」

とかえされて軽く落ち込む。  
ただ彼女の言葉には続きがあった。

「どうしても言うならそれで良い」

彼女は顔をそっぽを向きながら言った。

そう言った彼女の顔は真っ赤だった。

俺は彼女の仕草に不覚にもドキリとしてしまった。

ナニコレ可愛い。

「どうしても」

「…分かった。それで良い」

「よろしくな！アリサ」

「~~~~~！」

アリサは真っ赤になって、俯いてしまった。

か、かわいい…



「どうして…して…?」

「ん?」

俺が和んでいると、アリスは真剣な表情で顔を上げた。

「どうしてあなたは見ず知らずの私にここまでするの?」

どうしてか…どうしてなんだろう?俺にも分からない。

でも俺は彼女を見捨てたく無い。

それだけは分かる。

アリスを見ているとほっとけなくなる。

「ねえ…どうして…?」

「うーん、俺にも分からない。

でも、君を見捨てたく無い。」

「…見捨てたくない?そんな事であなたは一生を使つつもり?」

「ああ。」

アリサは真剣な目で俺を見てくる。

「あなたはどんな事があっても一生私と一緒に…その覚悟があなたにはある？…キリト？」

覚悟か…覚悟ねえ…

「勿論、君を守りたい。」

君の笑顔を…

その一言は、恥ずかしくて言えなかった。

「そ、そう、なら、け、契約を始めるわよ！」

俺は真っ赤になったアリサの前にひざまづかされた。

「ほ、本当に良いの？私なんかの為に…」

「決めたんだ。君を守りたい。」

「…わかった。

始めるわよ　　汝、我が契約に応じし者なり。

今その証を我に示せ。」

俺達二人の下に複雑な魔方陣が展開する。

「手を出して」

俺はアリサに右手を出した。

「少し痛いわよ。」

「え？」

そう言っただけでアリサは俺の右手の指を少し切って、魔方陣に垂らした。その後、《治癒》を掛けて傷を治した。

「平気なの？」

「まあ、慣れてるからね」

これ位の傷は日常茶飯事だ。…悲しいことに…  
アリサも自分の指を少し切って魔法陣に垂らす。

アリサは右手を差し出した。

何だ？

「キスしなさい。私の契約に応じるなら」

え？キス？マシで良いの！？

俺が期待一杯の視線を送ると

「も、勿論手によ？手に」

あからさま警戒された。

何かシヨック…

「…冗談なのに…」

俺は呟きながら、アリサに言われるように手の甲に軽くキスした。すると魔方陣が輝き、俺の身体の中に何かが入って来るような何とも言えない感覚がした。

そのまま十秒ぐらいで契約は終わった。

「もう良いわよ」

お許しが出たのでキスを止め自分の身体を見てみた。

「変わって無いな…」

「見た目はね」

うーん今一分からん

それから俺は契約の効果と少しの魔法のレッスンを受けた。

契約とは、相手に魔法、または魔術を使う為に必要な力を与える物らしい。

だから俺は今、魔法が使える！めっちゃ興奮するわ！  
魔法と魔術の違いは魔術が身体に変化をもたらす物たとえば身体強化等

魔法は火を出したり周りの事象を変える力という。

アリサと話して敵はこの森にある開けた場所に決定した。

そして今そこでアンデットを待っている。

俺はその間に魔法術（魔法と魔術の総称）の練習中

因みに雷の剣とかは、出来るには出来るが、今の俺では無理だそうです。

ちよっとショック…

～アリサside～

私達は森の開けた場所でアンデットを待っている。

さっきはキリトが名前を付けるとか言っただけ嬉しかった。でも、少し、ほんの少しだけ嬉しかった。

私のせいで、巻き込んだんだ…

倒してみせる…『アレ』を使っても…

暫くすると、少し遠くにアンデットの気配が現れた。

「ほら、遊んでないで、来たわよ。」

私はキリトに注意をして、アンデットに対峙した。

## 契約（後書き）

次、頑張ります！（-；-）

## 激突（前書き）

やってしまったた…ストック切れた…

友人U君にそののかされて

ストックそんな無いのに投稿した俺が馬鹿だった。orz

こんな作者ですが…生暖かい目で見守っていただけると幸いです。

誤字・脱字がありましたら即刻修正致します。



## 激突

桐人 side

「ほら、遊んでないで、来たわよ。」

アリサの呼び掛けで我に返る。

はっ…！つい夢中になってしまった。

くそっ…もう来たのか…

まだ遊びたりない…ゲフンゲフン練習したりないな  
てかアリサにバレてる！？

目の前に黒服が現れる。

俺は事前にアリサとの打ち合わせ通りに黒服に遠距離魔法を放つ。

「火よ…敵を貫け…《火の矢（ファイアーアロー）》！」

が、黒服は簡単に避ける。

…いや、分かっていたけどどやっば何か悔しい  
な…

因みに魔法って、イメージで決まるらしい。

さっきの火は『貫く』をイメージしたから、貫通力が高い。

俺は火しか使えない。が、それは相性の問題らしい。  
アリサは雷と水が使える。

大体の魔法師は一属性しか持っていないらしい。

いいなあ〜多重属性…

黒服が魔法を回避した隙に接近していたアリサが黒服の腹に強烈な蹴りを放つ。

うわぁ…痛そう…これからはアリサを怒らせたら駄目だな…

アリサの蹴りで木に衝突した黒服に俺はすかさず火球を放つ。

「火よ…敵を焼け…《火球（ファイアーボール）》」

木が燃え、煙のせいでアンデットの姿が見えなくなる。

よし、予定通り

その時、声が聞こえた。

『逃げる…』

「何だ…？頭の中に直接響いてくる…」

「これは《念話》よ」

俺の疑問にアリサが答えてくれた。

「《念話》？」

「そう、魔力を細い糸の様にして相手の頭に直接声を響かせる技よ。」

へー、そんな事も出来るのか…  
声はまた聞こえる。

『逃げる…私はもう誰も殺したくはない…』

殺したくはないと言う事は…

「殺したくはないって事はお前は誰かに操られているのか？」

『操られているのは少し違う、私は召喚者には逆らえない…』

「何故お前の召喚者はアリサを狙う？」

俺はずっと疑問に思っていた事を聞いた。  
後ろでアリサが一瞬『しまった』みたいな気配がする。何だ？

『それは分からない…私は殺せとしか言われていない。』

何かアリサが後ろでホッとしている…

『逃げてくれ…私はお前達を殺したくはない…！』

アンデットの必死な呼び掛けに俺は…

「嫌だね」

「『なっ…！』」

アリサとアンデットが同時に声をあげる。

「だって逃げてもまた来るだろ？」

『それは…そうだが…』

「なら逃げない…いや、逃げられない」

だって逃げても来るもん

「それもそうね…逃げられないわ…」

アリサが俺の考えに同調する。

『なら…私を殺してくれ…もう、誰も殺したくは無いだ…』

その声にはアリサが答えた。

「分かったわ。あなたは私『達』が倒す（・・）。」

あ、俺入ってんすか…うーん正直あんまり乗る気しないな…『あの事件』を思い出しそうで…

まあ、考えてもしかたないか…

俺はそう割り切って、煙の中から立ち上がったアンデットに対峙した。

アンデットは俺の放った火球で帽子が焼失していた。

水色の髪を腰くらいまで伸ばして肌は不健康では無いレベルで白く…  
…って、

「女じゃねえーかあああああああああ！！！！！」

俺は渾身の力で叫んだ…今までおっさんだと思ってた…確かにおっさんの割には、身長低いなーとは思ってたけどっ！（165あるか無いか）  
そんな俺に

「何言ってるの？さっきの《念話》、女性の声だったでしょ？」

アリスが呆れた目で止めをさした。  
た、確かに…orz

崩れた俺を無視して、話は進む。  
ちよつと酷くない？

『では、頼むぞ…』

そう言ってアムデットは俺たちに向かってきた。

（アリサ side）

「女じゃねえーかあああああああああああ！！！！」

…何を今更言っているんだろう？

「何言ってるの？さっきの《念話》、女の声だったでしょ？」

呆れた：キリトが何かブツブツ言っているが、無視する。

キリトがアンデットに何故私を追っているのか聞いた時は焦った。

私の事を言うんじゃないかと思って…契約をしている以上遅かれ早かれ言わなくてはいけないけど、私の中には、彼に真実を話して嫌われたく無い。

そんな思いがあった。それに言うなら自分で言いたかった。

（さっき出会ったばかりなのにな…）

キリトには、先程少し驚かされた。

何せ魔法術の才能を開いてまだ数分しか経ってないのに、もうある

展度初級魔法を使える様になっていた。  
才能があつたのか、呑み込みが早いのか、それとも両方なのか…これなら、固有魔法も時期に発動出来るんじゃないだろうか…そんな事を考えていると、

『では、頼むぞ…』

と言って、アンデットが私達に向かって来た。

私は右に、キリトは、左に跳んで避ける。

私はすれ違い様に雷の魔法を放つ。

「雷よ、敵を止める！《電流（ショック）》！」

この魔法は、攻撃力こそほとんど無いものの、相手を感じ電させ動きを封じる効果がある。

「今よ！アンデットは動けないわ！」

私の声が聞こえるとキリトは即座に反応して火球を放った。  
それと同時にキリトはまた、魔力の様な何か（・・・）で強化された、ちょうど剣位の大きさの木の棒でアンデットを斬り付けた。

しかしそれはアンデットの作った魔障壁（魔力で作った障壁）に阻まれた。



それでもアンデットは衝撃を受けきれずに、吹っ飛んだ。

すごい…！私の意図を瞬時に受け取って行動に移した。それに一番  
凄いのはアンデットを障壁ごと吹き飛ばしたあの力…とても素人と  
は思えない…！

私は、体制を崩したアンデットに《雷撃の槍》を浴びせた。

その隙に、彼は強化された木の棒でアンデットに斬りかかっていた。

「音無流抜刀術…三閃！」

そう言っただけでキリトは腰に棒を当てて、棒を振り抜いた。

勿論これも魔障壁に弾かれるが、その反動を利用して身を捻りもう  
一撃を加える。

しかしアンデットの魔障壁は軌道を逸らしたただけだった、魔障壁に  
亀裂が走る。

さらに、今度は軌道を逸らされて振り抜いた棒を返す力で斬り付け、  
魔障壁を破壊した。

『なっ…！ふふっ…面白い…そうだ、早く私を殺してくれ…！』

キリトが魔障壁を破壊すると同時に、後方に飛んだ。

私は魔障壁が壊された隙に上級魔法を放つ。

「業火よ、燃やし、燃やし、焼き尽くせ、《業火の一撃（バースト  
ストライク）》！！！」

私の放った魔法がアンデットに直撃した。これで倒せたら（・・・  
）どんなに楽か…

私はアンデットを殺す積もりは無い。

彼女は操られているのに近い、それはまるで、

（昔の私…）

だから私は、彼女を“殺す”のではなく、“倒す”事で救いたいと  
思った。

案の定アンデットは、立ち上がり、魔法を放って来た。

「大地よ、我が祈り聞き給え、《大地の剣（グランドソード）》！」

アンデットを中心に地面から出てきた岩の剣（つるぎ）が何千と出  
てきた。

（上級魔法！？）

「くっ…！」

いきなり上級魔法を放ったアンデットに、私は少し焦りながら水魔法で迎撃した。

「なっ…！」

キリトもいきなり出てきた岩の剣に戸惑いながらも木の棒で、弾き落としていた。

(あの棒…いや、それを強化しているあの技…彼は一体何者なんだろう?)

「アリサ！」

その声で我に返った私が見たものは、アンデットが私に炎弾を放っている所だった。

私は慌てて目の前に水壁を出す。

私の正面に飛んできた炎弾は私の水壁で消火した。

「後ろだ！」

キリトに言われて振り向く、すると岩の剣が飛んで来る。

(あっ…！避け切れな…)

私は恐怖で目を閉じた。

でも、衝撃は来なかった。私が目を開けると、そこに映ったのは……

私を庇って、剣に刺されたキリトだった。

キリトは私の方を振り向くと「良かった…」と言って、地面に倒れた。

激突（後書き）

く やつてみたかった、このコーナー く

夜刀神「予告道理に長く出来たー

まあ、ストック切れたが…」

桐人「ストック切れたら意味無くない？」

夜刀神「くっ…！痛い所を…」

桐人「普通の指摘だよ

と言うより俺、アリサを庇って…」

夜刀神「言うんじゃない！ここは特別なんだ！」

桐人「…まあ、良いけど…これからどうするの？」

夜刀神「ただやりたかっただけで、具体的には何も決めてないですが、何か？」

桐人「……………」

プスッ

夜刀神「目が、目がああア！」

桐人「…そういえば、アリサは？」

夜刀神「そ、それなら…今彼女は少し病んでるから呼ばなかった。」

桐人「え？」

夜刀神「そんな事より！この作品をお気に入りに入れてくださっている方が一人居られるんですよ！もう感謝感激ですよ！ありがとうございます！」

桐人「分かったからそんなに騒ぐな！」

ゴスツ

夜刀神「ぐはっ！」

桐人「こんな作者ですが、皆さん、暖かい目で見てやって下さい。ご指南、ご感想、お待ちしております。」

夜刀神「勝手に終わらされた…！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3319ba/>

---

契約の騎士

2012年1月11日06時48分発行